様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７０９０４

研究課題名（和文）甲骨文字に基づく漢字の字形・字義・字音の起原研究

研究課題名（英文）A Study of Origin of Chinese Character's Shape, Meaning, Pronunciation besed on Oracle Bones Inscriptions

研究代表者
落合　淳思（OCHIAI, Atsushi）

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：２０４４９５３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は漢字の成り立ちを明らかにすることを主目的とし、最古の漢字資料である甲骨文字の分析を中心とした。論文として「甲骨文字の字種整理」を発表し、また一般向けの書籍として『漢字の成り立ち』を出版した。前者は辞典製作における親字の設定方法を論じたものであり、後者では漢字の歴史などのほか近代の研究の問題点や新しい研究方法を示した。そして最終的な成果として『甲骨文字辞典』を製作・出版した。

研究成果の概要（英文）：This study is to clarify the origins of Chinese characters as the main objective, with a focus on analysis of the oracle bones inscriptions that is the oldest of the Chinese character document. Announced the "The Character Type Adjustment of Inscriptions on Oracle Bones" as the paper, also published the "Origins of Chinese Characters" as a book for the general public. The former is discussed how to set up a first character in the dictionary production, the latter shows the such as the history of Chinese characters, and problems of modern research and new research methods. And it was produced and published "The Dictionary of Oracle Bones inscriptions" as the final outcome.

研究分野：甲骨文字研究

キーワード：甲骨文字　漢字の成り立ち　全文検索データベース　甲骨文字データベース　甲骨文字辞典

１．研究開始当初の背景

甲骨文字は、今から三千年以上も前の文字であるが、西周王朝の金文や秦王朝の篆書などを経て、現在の漢字（楷書）にまで継承されているため、その字源（文字の成り立ち）を知ることは漢字研究において非常に重要なことである。

甲骨文字の研究は、かつて日本では盛んであり、多くの字典も製作・出版されたが、その後、研究者が減少した。その結果として、多くの誤解や曲解が残ってしまったのである。

一方、甲骨文字資料そのものの整理は継続して進行したため、現在では、整理された資料を元に、古い字典における学説の誤りを指摘できるようになっている。

２．研究の目的

前記の状況に対し、本研究では整理された資料を元に甲骨文字研究を再検討し、従来は誤って考えられていた字形の成り立ちや原義（文字が作られた段階での意味）などを明らかにし、漢字研究や殷代史研究の基礎を形成することを目的とする。

具体的には、甲骨文字の字形や文章における用例から字形の成り立ちや原義を分析する。また、それらの情報や研究手法を一般にも分かりやすく解説する。

なお、現在ではどの分野でもコンピュータを利用した分析が重要になっているが、日本では、これまで甲骨文字をコンピュータで検索する方法がなく、統計作業においては効率が劣る書籍を用いるしかなかった。これに対し、本研究では文字の分析と平行して一般的なコンピュータで使用できるデータベースも製作することで、網羅的に情報を検証し、研究における正確性を向上させる。

３．研究の方法

現存最古の漢字資料は殷王朝後期（紀元前13～前 11 世紀）に作られた甲骨文字であるが、従来の研究では西周時代（紀元前 11～前 8 世紀）の金文や始皇帝（紀元前 3 世紀）が制定したとされる篆書が甲骨文字と同程度に重視されていた。原初において、文字がどのように作られたかを明らかにするためには、より古い文字を参照しなければならないのであり、本研究では甲骨文字を中心にして字源研究をおこなう計画とした。

まず、字形による区分では約 4500 種とされる甲骨文字について、字義（文字の意味）による文字種を明らかにする。これは甲骨文字が使われていた当時の文字に対する認識を復元するために必要な作業である。また、甲骨文字では「殳」と「攵」や「牛」と「羊」など字形や字義が類似する部首が入れ替わることがあり、こうした例についても整理する。

上記の二つの作業は、当初は二本の論文として発表する予定であったが、まとめて「甲骨文字の字種整理」(後述) として発表した。

またデータベースの製作については、コンピュータのブラウザ上で検索・表示でき、かつ Microsoft Word(C)などのワープロソフトでデータを使用できる形態で製作を進める。

そのほか、字源研究を一般に向けてわかりやすく解説する書籍を公刊し、字源研究のほか漢字学習に有用な校正とする。なお、当初の計画では殷代の発音体系も復元する予定であったが、現状の資料では非常に困難なことが判明したため、一般向け書籍において字音利用の難しさを解説するにとどめた。

そして、最終的には甲骨文字の辞典という形で研究成果をまとめ、各項目に甲骨文字の字形やその成り立ち、楷書に至るまでの字形変化、甲骨文字で用いられている意味や用例などを解説する。

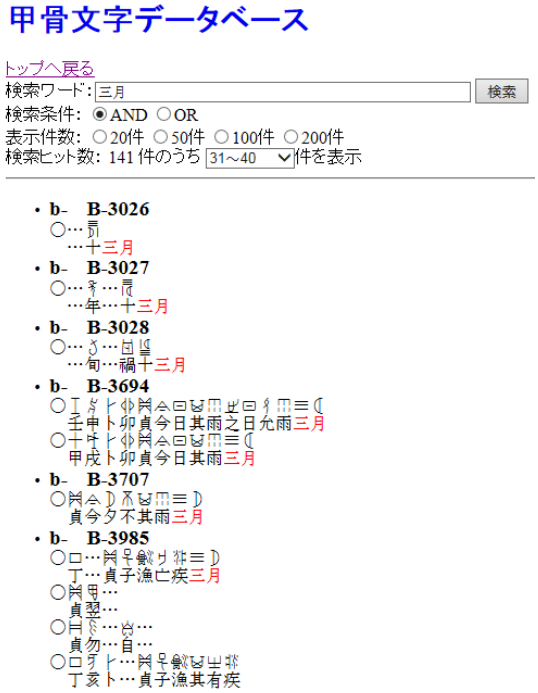
４．研究成果

(1)前述のうち甲骨文字の文字種および字形・字義による通用の問題については、「甲骨文字の字種整理」として論文にまとめた。

全三節構成であり、第一節では従来の分類方法と新しい分類方法を提示し、その意義を述べた。第二節では字形や字義から異体字を整理する方法についてまとめ、甲骨文字で通用可能な部首を字形や字義の面から述べた。さらに、甲骨文字には字形全体が異なっていても同一の（またはほぼ同じ）意味の文字があり、それについても記した。第三節では、第一・二節の理論に基づき、字義から推定される甲骨文字の字種整理と具体的な字種数について述べた。結果として、甲骨文字の字種は、字形からの分類では 4500 種程度とされるが、字義から見た場合、2000 種以下に整理できることが判明した。

(2)甲骨文字のデータベースについては、当初は全ての甲骨文字についてデータ化する予定であったが、予算の削減に伴い、既存の索引である『殷墟甲骨刻辞類纂』①に未収録のものを中心にデータ化した(約 18000 片)。

「甲骨文字全文検索データベース」は http://koukotsu.sakura.ne.jp/top.html で公開しており、次頁に掲載した図のように、任意の文字を楷書で入力すると、その文字（または文字列）を含む甲骨文字を原典の字形と釈字（意味を元に楷書に置き直したもの）で表示できるようになっている。そのほか、所謂 and 検索や or 検索も可能になっている。また、表示されたデータについては、ワープロソフトでも利用できる。



甲骨文字は簡潔な文章が多いため、字源研究や歴史研究においては統計的な分析が有効である。デジタルデータベースは、従来は手間のかかった統計作業を簡便にできる利点があり、本研究でも後述する辞典製作に利用し、比較的スムーズに執筆することが可能になった。

(3)一般向けの書籍として、『漢字の成り立ち』を公刊した。本書は全七章構成であり、字源研究の視点から先行研究の特徴や問題点をまとめ、さらに今後における研究の方向も示したものである。第一章から第三章は概説であり、第一章では漢字の歴史について、その草創期から楷書の完成期までを簡単にまとめた。第二章では漢字の構造や字形の変化、甲骨文法などを解説した。第三章では字源研究史について、古代から近年の研究までにわたって要点を述べた。

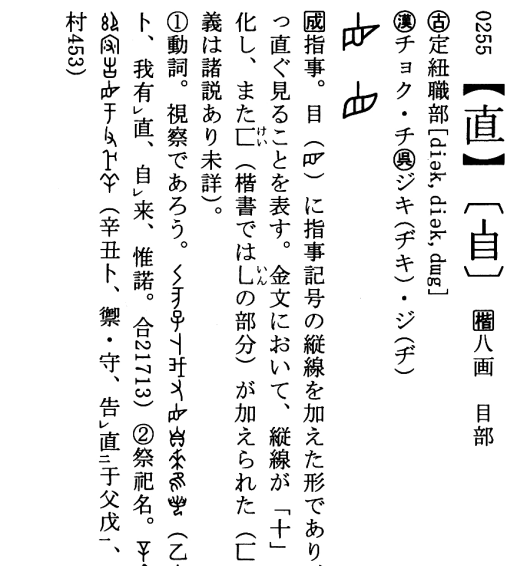
第四章から第六章は先行研究の検証であり、第四章では字音（文字の発音）を中心にした先行研究について問題点を列記した。字音とは、直接的には聴覚情報によって意味情報を伝えるものであり、視覚情報によって意味を伝える字形とは根本的に性質が異なっており、それらを無理に同一化したことが先行研究の大きな問題であった（発音の復元そのものにも問題がある）。第五章では、字形を中心にした先行研究について取り上げた。字形からの字源研究は一定の成果を挙げることができたが、先行研究では無前提に呪術や原始信仰と結びつける傾向があり、結果として研究にも誤りが多くなっている。第六章では字義からの字源分析について述べた。この方法は、従来は軽視されていたが、文章の中での意味、あるいは字形の構造における意義などから字源を明らかにできる場合があることを示した。

そして第七章では、今後の研究方針を具体例によって提示した。これまでは字源が明らかにされていなかった文字についても、用例を豊富に集め、資料の時代差を考慮し、関連する複数の文字を比較することにより、科学的な分析が可能になるのである。例えば、従来は「求」の成り立ちを「毛皮の象形」としていたが、これは後代の仮借（発音を借りた一種の当て字）に基づく誤解であり、甲骨文字の字形および関連する文字と比較すると、祭祀儀礼に用いられる物品であることが判明し、植物の一種と推定される。こうした字源分析の手法は、後述する『甲骨文字辞典』で活用している（ただし辞典では紙面の都合で分析過程を詳細には述べていない）。

(4)最終的な成果として、『甲骨文字辞典』を発表した。本書は大きく分けて概論（約 50 頁）・本文（約 600 頁）・目次等の付録（約 100 頁）から成る。

概論は甲骨文字やそれが作られた殷王朝について解説したものであり、入門者にも使いやすい構成に心がけた。三節から成り、第一節では漢字の歴史と漢字の成り立ち、および字源研究史などを述べた。第二節では甲骨文字および甲骨文法の特徴を挙げ、八点の訓読例も挙げた。第三節では、殷王朝について歴史や支配体制、祭祀や政治勢力などについて述べた。

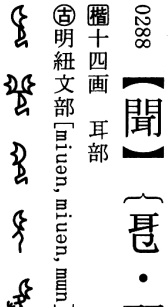
本文は、一般的な漢和字典とは異なり、甲骨文字の字形と文字の成り立ちを重視しており、楷書に至るまでの変化が大きい場合はその過程と甲骨文字の構造を楷書で表したものも掲載した。また甲骨文字の字義のほか、用例を原典の字形とともに採録したことが特徴であり、楷書の部分に返り点も付して読みやすくしている。（次図参照。『甲骨文字辞典』90 頁および同 100 頁）。


0255 【直】〔𥃝〕 𥃝八画 目部
㊀定紐職部[diək, diək, dug]
㊁チョク・チ㊀ジキ（ヂキ）・ジ（ヂ）
𥃝 𥃝
𥃝指事。目（𥃝）に指事記号の縦線を加えた形であり、真っ直ぐ見ることを表す。金文において、縦線が「十」に変化し、また𠃊（楷書では乚（いん）の部分）が加えられた（𠃊の意義は諸説あり未詳）。
①動詞。視察であろう。（乙亥子卜、我有乚直、自乚来、惟諾。合21713）②祭祀名。（辛丑卜、禦・守、告乚直二于父戊一、羊。村453）

0288 【聞】〔甚・甚・見・耳〕

十四画　耳部

㊀明紐文部[miuen,miuen,mun]㊁ブン㊂モン



㊀会意→形声。耳（𠂤）と口（口）や人（亻）などから成り、耳で聞いている人を表した文字。古文において、耳を意符、門を声符とする形声の字体が作られた。

①聞く。聞かせる。報告がある場合にも用いられる。三日乙酉、夕、月有食、聞。八月。合11485・験辞）②祭祀名。貞、焼・聞、有従雨。補3799）③人名。第一期。聞子（子）とも呼ばれる。壬卜、丁聞子呼…（壬卜、丁聞子呼…、弗作嬈。花38）

付録については、甲骨文字から置き直した楷書の音読みおよび画数の索引のほか、甲骨文字の字形の索引も掲載しており、原典の甲骨文字から直接的に引くこともできるようになっている。そのほか、用語解説や参考文献なども付している。

本書は字源の研究書であると同時に、本邦初の甲骨文字を読むための辞典でもあり、従来は一文字の単位でしか古代漢字を解説した字典がなかったが、本書は概論で文法について解説し、また本文では用例や一部の熟語も採録しており、実際に甲骨文字を文章として読解できるようになっている。したがって、字源研究のほか、古代文化研究や殷代史研究などの分野の発展に対しても貢献することが期待できる。

引用文献

①姚孝遂主編『殷墟甲骨刻辞摹釈総集』、中華書局、1989 年

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

①<u>落合淳思</u>「甲骨文字の字種整理」、『立命館文学』、査読有、633 号、2013 年、27 – 39 頁

〔図書〕（計　２件）

①<u>落合淳思</u>『甲骨文字辞典』、朋友書店、2016 年、全 758 頁

②<u>落合淳思</u>『漢字の成り立ち』、筑摩書房、2014 年、全 286 頁

〔その他〕

ホームページ等

http://koukotsu.sakura.ne.jp/top.html
（甲骨文字全文検索データベース）

６．研究組織

(1)研究代表者

落合　淳思（ OCHIAI, Atsushi ）
立命館大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：20449531